

猫

水沢朱実

昨日、長生きをした猫が死んだ

死んだ母の誕生日だった

父に「すずは死んだよ」

と聞いても、正直何も考えられなかった。

雨の日の夕方に、拾われてきた子猫だった。

雨の好きな子だった。

茶色の眼で、外の雨をじっと見つめていた。

身じろぎもせず。

雨の向こう側に、私たちではない

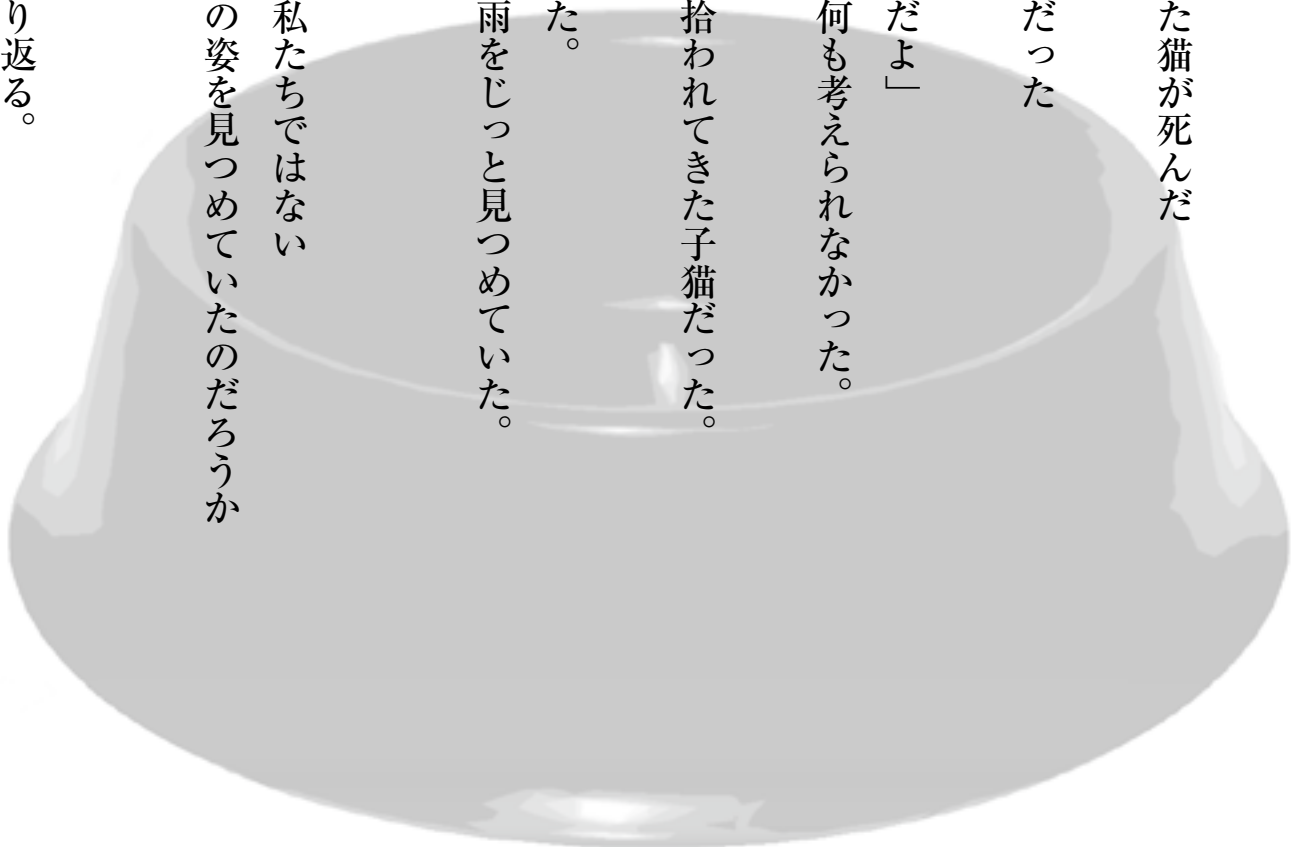
本当の自分の家族の姿を見つめていたのだろうか

「すず」

名前を呼ぶと、振り返る。

「お外見てるの？」

にゃあ、と鳴く。



私はその眼をのぞき込み、頭をそつと撫でる
猫は眼を細めて、
されるがままになっている。

「何、見てるの？」

返事など、出来る訳はない。

ただ、私も、

「彼女」が何を考えているのかを、本気になって知りたがっていた
のかもしれない。

暗転。

新しいタオルで包んだ猫をなでてやることもできず
まして顔を見てやることもできず

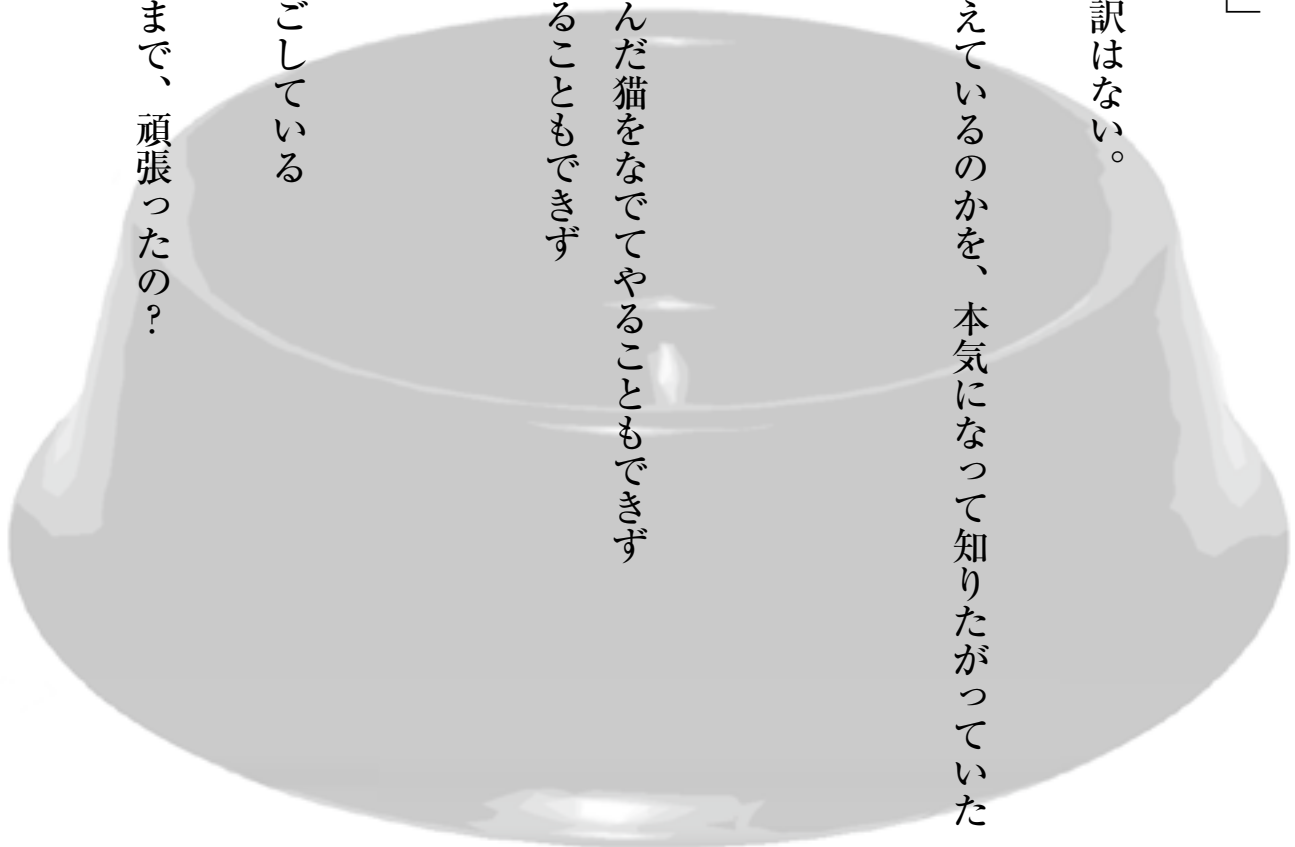
ただ

私は茫然と時を過ごしている

お母さんの誕生日まで、頑張ったの？

すず

お姉ちゃんはここにいるよ。



朝

水沢朱実

朝が来る。

キッチンに立ちながら、窓からの日差しを受け止める。

冬の日差しは暖かい。

焚火のような暖かさがある。

コードレスのイヤホンを耳に差し、スマホをワゴンの上に置く。

セリーヌ・ディオンの歌声が、優しく耳に響く。

コードレスに頼りすぎて、スマホを見失ったのは、他の人には内緒だ。

前日の夜の皿を片付けながら、今日も今日が訪れた、と思う。

一日一日を、感謝しながら。

今日も私は一日を始める。

電気釜のスイッチがオンになる。

さて、食事の支度は父の役目だ。

父の起きて来るのを待とう。

死神

水沢朱実

気が付くと、いつも隣にいるのは人ではなく、死神だった。

グレーのフード付きマントを身に付けては、

骸骨の顔と身体をもち、

空虚な眼窩でかか、と笑う。

——あなたは誰ですか。

聞こうにも、何と言えいいのか、解らない。

だって、私は生者で、彼は死者だから。

けれど。

死者はいつも夢の終わりにはいつも、こんな答えを残して姿を消す。

——命の途中で死ぬなよ。

命を粗末にする奴は、

次の生で人間にはなれないんだ。

言いながら、死神の身体は、砂のようにさーと細かく、そして全身に砂が隠して

私の前から姿を消す。

不思議と、怖くはなかった。

死神の去った後で、私は自問自答する。

「死者と、生きた生身の人間と、どっちが怖いだろう?」

答えは、わからない。

ただ、私はこの先も、

死者にも、生者にも巡り会って、そしていつかは私も

生者への忠告をするために

死神というものになるのだろう。